

The ancient Phoenician cities were famous for their production: beautiful purple fabric, transparent glass, and exquisite metalwork. They traded fashion and design through their marine transportation networks.

Ancient Greek people not only studied Phoenician knowledge, technology and writing methods, but also embodied their own thought in their architecture and city planning. They found an appropriate arrangement---agencement, in French, which implies "agency," in other words an arrangement made by an agent---of buildings so as to make their city open to traders. The acropolis, agora, and amusement activities of the city were places in which to channel the traders' desires.

#### フェニキア人のファッションとデザイン

われわれ研究室の有志が地中海を旅したのは、わたしが京都大学に着任した 1992 年から 1995 年にかけてのことだ。まずギリシア、キプロス、トルコ、次にヨルダン、シリア、そしてイタリア、最後にスペイン。

地中海を旅しながら、われわれは多くのフェニキア人たちの痕跡に出会った。紀元前 2000 年頃に花開いた東地中海国際文化。繁栄が突如として終わりを告げた紀元前 12 世紀頃から、かれらの活動は独自の形を取って現れ出る。その繁栄の残り香を漂わせながら。クレタはとうに力を失い、ミケーネが没落した前 1200 年頃からの、いわゆる「暗黒の時代」にはいて、かれらの活動は際立ち始めるのである。地中海をフェニキアが制していく。

ただそれはあくまでも痕跡であって都市遺構ではない。われわれが旅した遺跡の多くはギリシアとローマの都市遺構であり、フェニキア人の都市は明快な姿をとどめていない。かれらについては、岬や湾や泉や岩など、機能的、象徴的、そして経済的な観点から場所の力を読み取りつつ、防御に配慮した港町をつくっていったことが知られている。これらはのちに「ポエニの風景」と呼ばれる。

キプロス、クレタは特に重要な拠点だったが、チュニス、のちのカルタゴ以西は地中海の南岸を辿って航海し、夜の停泊地を求めて、海沿いに居留地を築いていった。そしてその道すがら、シシリーやイビサなど多くの島にも足跡を刻んでいる。かれらはジブラルタルをはさみこむヘラクレスの柱に至るまで、いやその外側にも達しつつ船を進め、居留地を築いた。ヘラクレスはいくまでもなくかれらの主神メルカルト、バアルであり、のちのギリシア神話において苦難に遭遇しつづける英雄となった。

商業民だからさぞ合理的な都市計画をしていたことだろうと想像はしてみる。居留地はギリシアやローマのように地域に根づくという思想はなく、ただ物流の中継地であり砦であったようだが、シドン、テュロスといった中心都市の構築性は極めて高く、その富の蓄積のみごときは、旧約聖書にも描かれている。溢れる富を相互に分け与えるソロモンとの関係。ダビデ、ソロモンの建築

を技術的に支えたのもフェニキア人だ。バビロンの王ネブカドネザル2世がテュロスを破壊したとき、その損失の大きさに、エゼキエルはおおいに嘆いた。<sup>1</sup>かれらの本拠地であったシリア地方にはいつも、アッシリア、ネオ・バビロニア、ペルシアといったメソポタミアの強大な王権の圧力が迫っていたから、築かれた陸の拠点は防御の場であり、それがそのまま海への脱出口でもあった。

フェニキア人の記録は少ない。かれらが残したのは碑文の類だ。とはいえ、商業民であるから、商売の記録は必ずあったはずだ。おそらくは粘土板にでなく、蠟引き板か羊皮紙、あるいはパピルスに書き留めていたのだろう。だから結果的に残らなかった。

これは移動の民にとっては当然のことかもしれない。時代は下がるが、アケメネス朝とササン朝を繋ぐアルケケサス朝、いわゆるパルティアも、文字の記録が少ない。なぜなら交易が活発だったからだ。重たくかさばる粘土板に文字を刻むのは、スピードと効率と持ち運びを重視する交通と商業の民にはそぐわない。とりわけ移動の民にとって、＜圧縮・保存・輸送＞の技術は、死活問題なのである。フェニキア人は、歴史に残るより現世の繁栄を求める民であった。

かれらについては、むしろ競争相手のギリシア人たちの悪意をこめた饒舌によって、その輪郭を窺い知ることができる。<sup>2</sup>フェニキア人は残された文献の面では寡黙だったから、弁護人抜きの論告求刑のようなところがある。だから悪口はかなり割り引くことにしよう。すると、フェニキア人が、ポエニケーというその名の由来である青みがかった深紅の染め物（ばら色から緋色、紫にまで至る、とフェルナン・ブローデルは述べている）<sup>3</sup>や、はじめての透明なガラス製品や、みごとな金属細工など、確かな技術に裏づけられた商品力のある製品を生産していたことがわかる。しかも、高い建築技術をもち、優れた造船技術と航海術によって海を制し、遠隔地を結びつけながら、この時代の人々の欲望を強く惹きつける商売をしていた姿がうかがえる。だから少々強気に出て、あこぎなやつだと裏口をたたかれながらも、貿易立国でやっていけた。技術と商品力が物を言うのはいつの時代も同じだ。

ところでかれら自身は自らをフェニキア人と称してはいない。あくまでもシドン人であり、テュロス人であり、ゲバル（ビプロス）人だ。都市の民だ。農耕牧畜の後背地を持たない、純粋な都市の民だ。そしてかれらこそが、都市は交易によって自立しうることを証明した。

かれらの交易は基本的に加工貿易であり、中継貿易であった。しかも独自の特産品をもっていた。そしてそれは農産物ではなかったから、土地にしがみつくな必要もなかった。すなわち人類史上初めて、土地に縛られることのない居住形態を可能にしたのである。やがてフェニキア人にとって代わるギリシア人たちも、航海術にとどまらず、商業・貿易立国の秘訣や居住形態などの多くを、かれらから学んだにちがいない。

かれらの特産品が、生活必需品でなく、かといって宝石のような物自体の価値に頼った貴重品でもなく、美しい色をした布、透明なガラス、みごとに加工された金属、木、象牙といった、ファッションやデザインであったことに注目していい。裏を返して言うならば、ファッションやデザインという、人々の夢と想像力によって生きていくことが可能になるほど、当時の東地中海文化は成熟していた、ということがわかる。フェニキア人たちの商品企画開発能力によって、東地中海は大きなマーケットとなり、商品を待つ人々の欲望を生み育てていったのである。

文明は便利さの追求に向かい、文化は不便さ（理不尽かつ非合理的なカッコよさ）の洗練に向かう。当時の文化の洗練が窺い知られよう。あるいは文化を洗練させたのがかれらの製品そのものであったというべきかもしれない。人類は、遙か昔から、必要なものよりオシャレでカッコイイものを求めるようにできているのである。これもまた、ギリシア人がフェニキア人を引継ぎ、や

た」といえば、「彼らはツロ（著者註：テュロス）の城壁を破壊し、その塔を引き倒す。わたしは彼女から土を一掃し、彼女を裸の岩にする。」「彼女は諸国民の略奪の的となって、野にある彼女の娘たちは剣で殺害されよう。」「<sup>(p.104)</sup>「彼らはお前の財産を奪し、交易によるお前の富を略奪する。」「<sup>(p.105)</sup>「ああ、お前は滅亡し、海から消滅した、かつて海で強くなって、賛美された町よ。」「<sup>(p.106)</sup>「お前は自分の心を神々の心のようにしたがゆえに、それゆえ、みよ、わたしは諸国民の中

の最も凶暴な異国人（著者註：ネブカドネザル2世のことである）をお前に向かわせる。彼らはお前の知恵の美しさに向かつて剣をふるい、お前の栄華を冒瀆する。」「<sup>(p.110)</sup>「おまえは特愛の印章であって、知恵に満ち、美しききわみであった。おまえは神々の園エデンにいて、あらゆる宝石が

おまえの包衣であった。」「<sup>(p.116)</sup>等。ここで「わたし」とはヤハウェであり、エゼキエルがこれを読み取ったのである。『エゼキエル書』、月本昭男訳、岩波書店。

端 倪すべか

フ エルナン・ブローデル『地中海世界』、神沢栄三訳、みすず書房、1989

らざる能力の持ち主であったのはたどえばヘロドトスが「フェニキア人は何をやっても頭の良さを発揮した」と述べたりしているのを見てわかる。（ヘロドトス『歴史』、松平千秋訳、岩波文庫、下巻、p.29）

がて超えていった領域なのである。

哲学の祖、ミレトスのターレスも先祖はフェニキア人であったとの説がある。<sup>4</sup> ストア派のゼノンもまた。おそらくは思想的にも優れた資質を持った民族だったのだろう。キプロス出身のアフロディテーや、ヨーロッパの名前のもとになったエウロペもレヴァントの海岸からゼウスにさらわれてクレタに連れ去られたからフェニキア人といっていいだろう。ギリシア神話経由で、フェニキア文化のヨーロッパ文化に果たした役割も大きい。

そしてその活動範囲は、思いがけぬほどの広がりを持っていた。ギリシアの歴史家ヘロドトスは、アフリカ大陸を一周して来たというフェニキア人のエピソードを紹介している。<sup>5</sup> ヘロドトスはこの話を訝しんでおり、その理由は「太陽は右手にあった」というフェニキア人の報告にある。この「太陽は右手にあった」というのは、太陽が北に見えたということで、ヘロドトスには「信じ難いことである」のだが、むしろ、赤道を越えて一周したことの動かぬ証拠といえるだろう。フェニキア人たちは、バスコ・ダ・ガマが希望峰をまわるより 2000 年以上前に、アフリカ一周を成し遂げていたのである。時計まわりに。最後には「ヘラクレスの柱」と呼ばれたジブラルタル海峡を通して地中海に戻って来た。

そういえば、このギリシアの英雄ヘラクレスも、フェニキア、テュロスの主神メルカルト神と同じだと考えられている。

時代はおおいに下がるが、ここでアレクサンダーとヘラクレスの関係に思いを馳せてみよう。紀元前 4 世紀のアレクサンダー大王のアジア遠征。アレクサンダー自身がヘラクレスの末裔をもって任じており、人々にもそう信じさせることが重要だったのだろう。つまり神話が遠征を正当化する論理であった。ギリシアの人々はアレクサンダーをヘラクレスに重ね合わせることによって、ヘレニズム世界の拡大と実現を了解した。かれは、フェニキアの最も重要な都市テュロスを徹底的に攻略しながらも、その主神メルカルトの神殿<sup>6</sup>

に逃げ込んだ者は許し、なお盛大なスポーツの催しと供犠を奉げたという。アレクサンダーがテュロスにこだわったのは、そこがヘラクレスの聖地であったからだろう。メルカルトに供犠を捧げようとして拒否されたのでなお逆上したとも伝えられている。もちろん聖地には富が埋蔵されている。ただ聖地巡礼の気持もあったのではないか。むしろアレクサンダーの遠征自体が聖地巡礼であったと見ることも可能かもしれない。ヘラクレスの偉業をトレースしながら。なにしろヘラクレスは移動と植民を体現する神なのである。そしてアレクサンダーは、聖地バビロンで生涯を終えている。

ロドトス  
 この神殿について触れている。あつたが、教ある奉納物の中でも「私はこの件に関して正確な知識を特記すべきは二本の角柱で、一つを与えてくれる人に会いたいと思は精練された黄金製、一つは箇中い、海路フェニキアのテュロスまでも輝くほどの巨大なエメラルドで渡ったことがある。ここにヘラクレスの神殿があると聞いたから」(ヘロドトス、前掲書、上巻、p.190)

ウガリット：場所を移した都市ゲーム

シリアの地中海岸にラタキアという港町がある。港があり、市場があり、ホテルがある。瀟洒な保養地の趣である。1993 年の 9 月に、われわれはこの地を訪れた。

旧フランス領のシリアは街や人の雰囲気があかぬけている。 Damascus ではイスラム教国にもかかわらず、屋台でビールが手に入るし、怪しげなバーがビルの 2 階にあって、男の軍人同士がビールを飲んでキスしたりもしている。目が合うとニヤリとめくばせをする。イスラムであり、フランスである。

ラタキアから海沿いの道を北に 10 キロほど行くと、アルファベットの発見で有名な古代交易都市、ウガリットの遺跡がある。

ウガリットの発見は、1928 年、畑を耕していた農夫が偶然に掘り当てた墓石に端を発する。フランスの調査隊がやってきて、ここが文献などで古来名高い交易都市、ウガリットであることがわかった。

しかも画期的だったのが、今日のアルファベットの原型と見られる完全な一覧表が出土したことだった。粘土版に刻まれた30の楔形文字、これが音標文字として整えられており、のちにフェニキアからギリシアを経てローマへ、あるいはアラムを経てペルシア、アラブへ。そして今日のアルファベットへとつながってゆくのである。

ウガリットが繁栄をはじめめる紀元前二千年期前半、いわゆる青銅器時代中期（前2100-1600）には、メソポタミアの商業・交易はペルシア湾岸地域から東地中海沿岸地域へとその関心の重心を移していた。レバノン杉の名で知られる豊かな木材資源に恵まれていたのと同時に、アナトリアとの境を走るタウルス山地の銀、とりわけキプロスの銅など、天然資源が発見され、その必要性が高まったからでもある。

強力な国家が形成されて、独立した商業民にとっても好ましい条件が成立してきた。国家と商業は相互依存関係にある。流れをとどめるものそこから溢れようとするものは、互いの存在を必要とする。守り守られ、利益を分かち合う相棒として。商業には地域的差異とともに平和領域が必要なのである。この平和領域をマーケットという。国家の主要な役割は、マーケットを保護し発展させることであって、これは今日でも同様である。近代国家もまた、商業資本と持ちつ持たれつ関係を保っている。

東地中海はそのかなたに新たなマーケットを見出してもいた。たとえばクレタ島では宮廷経済が成立し、特産品であるオリーブ油とともに、その工房では特徴的なデザインの陶器をはじめ、銅や羊毛の加工が行われて、よき賭金を持つ交易の有力なプレイヤーの一人に育っていった。

やがてこの平和を愛する文化的なプレイヤーは、おそらくは黒海北方あるいはカスピ海あたりから移動を続け、ギリシアに侵入してきた好戦的な民族にとって変えられる。これがギリシア神話の主な舞台となったと考えられるミケーネ文明を築いたミケーネ人であって、のちにギリシア人と呼ばれるインド・ヨーロッパ語族の一派であった。プレイヤーは交代しても、海を媒介とする交易ゲームは終わらない。それどころかますますの発展を見せる。

紀元前3000年、メソポタミア低地の農業生産力を賭金としてはじまった都市のゲームは、交通手段と価値ある生産物あるいは加工品、すなわち商品の変遷とともに場所を移し、今度は東地中海に舞台を移して、新たな都市ゲームを誘発していったのである。<sup>7</sup>

移動はいつも人類の歴史発展の原動力であって、この移動に対する欲望が、交通の発達にも結びついた。東地中海周辺地域は海運によって結ばれてゆく。前14世紀のエジプトのアマルナ文書にも描かれているように、青銅器時代後期（前1600-1200）はそうした東地中海文化の最盛期であり、ひとまずの終局でもあった。ウガリットもまたこの頃最盛期を迎えた都市ゲームのもっとも有力なプレイヤーだったのである。

ウガリットを都市として築きあげた人々は、西セム語系のアモリ人だろうと考えられている。当然かれらも移動してこの地にたどり着いた。都市は移動民によって造られるという定理はここでももちろん有効である。前2000年紀前半にかれらは移動を繰り返し、各地で権力を掌握した。南のビブロスがエジプトと強い関係をもっていたのに対して、北のウガリットはアナトリアのヒッタイトとの関係が強かった。その関係で、キプロスを含む東地中海の北のエリアに強力な交易ルートをもっていた。と同時にユーフラテスからタドモル（パルミユラ）を経て地中海に至る陸の交易ルートの終着点でもあった。前14世紀から13世紀にウガリットは全盛期を迎え、そして最後の繁栄を謳歌したのだった。

この地にアルファベットが生み出されたのももっともな話だ。紀元前2000年期のシリア地方（今日のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルを含む地域）の諸都市は勃興してきた西（地中海）と東（メソポタミア）の間に立って交易の主役に踊り出た。交易の発達、異文化交流の

ル・ドゥルーズとフェリ  
ックス・ガタリが『千の  
プラトール』（『捕獲装置』の中  
で国家の成立に触れつつ、このゲ  
ームの質の変化を語っている。か  
れによれば、西方（地中海）の活  
性は、東方（メソポタミア）に  
比べて商人と職人への抑圧が少な  
いからである。それは生産地  
をかかえこむか、中継・加工に徹  
するかの違いでもある。生産地を  
かかえこむと領土保全に汲々と  
せざるをえない。中継・加工なら  
土地と切れることができる、つま  
りより自由になることができるの  
である。

スピードを上げる。文字はもともと商取引の記録として生み出されたが、宮殿の中に閉じこもった状態から外に出て、異文化、異言語間の交流のただなかに押し出され、交換の多方向性が増すにつれ、早くわかりやすい記述法が要求されるようになった。つまり異なった言葉を発音のままに記すやり方が求められたのである。そして生み出されたのが音標文字だった。

アルファベット＝音標文字は、文物の名も商人の名も決済の結果も、くどくどしく意味などにわずらわされることなく、音だけで記録することができる。文化・言語を異にする人々の商取引において、アルファベットの発見はいかに大きな力となったであろうか。コミュニケーションの手段もまた交易のスピードにふさわしい形に洗練されていく。コミュニケーションのスピードと手段の簡便化は、そのまま商売の効率につながる。アルファベットは商業海洋民族の合理性をバックグラウンドに発展を遂げたのである。

逆にいえば、アルファベットを生み出し、あるいは採用し、洗練した民族が、商業的なヘゲモニーを握っていったのだといいいい。アルファベットは当時の商業シーンのなかにあって画期的な技術革新だったといいいいだろう。

紀元前 1200 年頃に、ウガリットは地震と火災で壊滅し、二度と再建されることはなかった。その理由は謎だ。ウガリットの繁栄を支えた宮廷経済は崩壊し、その時期も東地中海文化の没落と機を一にしている。あるいは天然の良港がもはや機能しなくなったのかもしれない。

シリアの諸都市、のちにフェニキア人と呼ばれる人々の活動の拠点は、これ以降ウガリットより南に移り、シドンやティロスが中心的な役割を果たす都市となった。ウガリットはその歴史的役割を終えたのである。

われわれが訪れたウガリット、今はラース・シャームラー、つまりウイキョウの丘と呼ばれる小高い丘は、人影もなく、ただ強い太陽が照りつけていた。岩肌をトカゲたちがかさこそと這いまわっている。静寂が支配する遺跡とトカゲは相性がいい。荒涼とした風景が目前にあった。

三つの王宮と多くの神殿、とりわけフェニキア人の信仰を集めたパール神殿がそびえ、遠隔地交易にかかわる商人たちの事務所や倉庫が立ち並び、異国の商人たちも拠点を持ち、公文書室も置かれ、狭い街路が網の目のように走って店や工房が通りに面した住宅地が広がっていたはずの当時の面影はまったくない。

溢れる光に目がくらみそうな大地を歩いていると、ところどころに暗闇がぱっくりと口をあけている。地下に向かって降りていく石段が残っているのが見える。ウガリットの住宅の特徴は、地下に墓室を持つことなのである。ウガリットの住民は先祖の魂の上で、日常生活を送っていた。雨と嵐、雷鳴と稲妻の神、パール神の玉座、アクラ山を背後に控えて祝福されたはずのこの都市は、歴史の舞台から姿を消すことになった。技術革新によって興隆し、地震によって消滅する。人間の営みは、ついに自然を凌駕することはできないのだろうか。

#### 生産・交通・通信・居住の技術革新

紀元前 1200 年頃の、東地中海沿岸の大変動、エジプト史料のいう「海の民」の移動によって、東地中海の秩序は崩れた。ここにも気候変動の影響が見てとれるだろう。前 1200 年頃から、地球は再び寒冷化する。寒冷化は民族の移動を加速する。

移動は交換をもたらす。そして交換には交易と戦争があるのである。温暖な時期も移動はなされるが、温暖下での移動が交易をもたらすのに対して、寒冷下での移動は争いをもたらす。せっぱ詰まってる移動だからだ。寒くなると人類はじっとしてられない。

移動する専門家職人集団ハビルに発するヘブライ諸部族もパレスティナに移動、定住した。アカイア人もトロイを侵略している。前 12 世紀末にはドーリス人がギリシアの地を南下した。同じ頃、

エ  
ジプト王メルエンプタハ  
(在位前1224-1204)の  
碑文によれば、「海の民」は5歳

ループからなり、アカイア人、エ  
トルリア人、リュキア人、サル  
ディニア人、シチリア人であつ  
た。(小川英雄・山本由美子『オ  
リエント世界の発展』中央公論  
社、1997pp.45-46)

移動する民、アラム人もレヴァント内陸部やユーフラテス川流域に侵入し定着した。アラブ人も移動と入植を続けている。

前2000年紀から1000年紀に移るこの時代に、人類の移動と活動の範囲がここまで広がったのは、技術革新にもよっている。一つは、鉄の技術の拡散である。「海の民」自身も、鉄製の武器を持っていた。かれらは圧倒的な脅威だった。その出所は謎だ。ヒッタイトからトロイを經由したものでしょうか。かれらの出自も謎に包まれている。クレタ人やミケーネ（アカイア）人が関わっていると伝えられてもいる。<sup>8</sup>

前1200年頃の「海の民」の民族移動。アナトリアのヒッタイトはこれと期を一にして崩壊する。このヒッタイトこそが鉄の技術をもっていたのだった。かれらもかつて移動民としてこの地に侵入してきたのであって、インド・ヨーロッパ語を使い、王族、戦士、祭司、商人、職人、といった自由民階級をなし、メソポタミアの神殿よりもさらに閉鎖的な城砦的の神殿を築いて、農耕をおこなう先住民を支配した。そんなかれらもいまや新たな移動民によって衰退するのである。

前14世紀あたりからこのヒッタイトが独占していた鉄の技術が、かれらの崩壊に伴って拡散した。キプロスはすでに前11世紀半ばには鉄器時代を迎えて、地中海世界の先駆けとなった。オリエントも前10世紀には鉄が広く普及していたことは、値段が下がったことによって知られる。このとき、大きな技術の拡散、つまり技術者の移動がおこったはずだ。

また消石灰からはモルタルの技術が生みだされた。鉄を用いて掘った井戸をモルタルで固める技術ができて、深井戸が可能になった。水が確保され、居住の範囲が大きく広がった。すなわち植民の範囲が、である。鉄、およびこれを支援する技術の進歩によって、生産性も高まり、居住形態の可能性もまた広がったのである。

アルファベットが生み出されたことはさらに大事件だ。おそくとも前13世紀には、ウガリットですでに31文字のアルファベットが工夫されていた。ビブロスでは22文字のアルファベットとなる。商人に扱いやすい、しかも意味に囚われる必要なくさまざまな言葉や名前を書きあらわすことのできる文字。アルファベットによって記録と流通のスピードと効率、大幅に向上したことだろう。フェニキア人がこれをギリシア人に伝え、紀元前8世紀にはギリシア語に適用された。前1200年頃には、ラクダの家畜化が完成した。一種の交通革命だ。これを自在に使いこなしたのがアラム人たちであった。かれらがこれをオリエント中に広めた。アラム語はのちにオリエントの商業民の共通語となる。のちのアケメネス朝ペルシャでも日常語として用いられた。隊商都市パルミュラやベトラでも用いられた。イエスがしゃべっていたのもこの言葉だ。エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ（『マルコの福音書』）。アラム語の文字も、フェニキアから導入されたアルファベットによっていた。

交通を制するものが言語を制する。交通を押さえるものは文化の流通も手に入れる。ラクダという、遠距離を無給水で移動するこの画期的な交通手段の成立によって、陸路の距離が縮まり、物流が一層加速された。交通技術の革新が世界を変える。アラム人の隊商路、この陸のネットワークがフェニキア人たちの海路に接続されたのであった。フェニキアの隆盛の基礎はここにある。陸のアラムと海のフェニキアが言語と文字の流通を押さえる。〈圧縮・保存・輸送〉の技術革新である。かくして、経済が政治の枠を乗り越え、領土を横断して、新しい流れが作られていったのだった。

東地中海に大きな移動がおこり、それまでのパワーポリティクスが大きく変化した気候変動期、紀元前1200年頃は、同時に鉄の技術の拡散期であり、交通の発展期であり、記録および通信手段の発展期であり、居住可能性の発展期でもあった。ラクダの交易路と杉の造船技術と航海技術が結ばれ、革命的な文字アルファベットが生み出され、鉄とモルタルによる居住地拡大がなされた。フェニキア人たちは、この生産・交通・通信・居住技術の発展を追い風としながら、海の民の掃

除した東地中海で勢力を伸ばしてゆく。

かれらはずねに、強大国に背後を脅かされていただけに、新たな交易の中心となった地中海をしっかりと見据えた。商業という知恵と勇気と合理性の要求されるフィールドに、自らの活動の場を定めていった。

繁栄の果実を味わって流れが滞りつつある東方、すなわちメソポタミアと、勃興する西方、すなわち地中海沿岸。このふたつを結びつつ、直接の生産から切れ、領土の重みからも自由になって、加工と中継の交易によって富をえる。ファッションとデザインの付加価値で富をえる。物、人、情報の交流によって富を得る。これがフェニキア人の築いた新しい居住形態である。

それを都市のプログラムとして練り上げていくのは、フェニキアから知識と技術と文字を受け継ぎ、生活スタイルをも受け継ぎ、地理的にも専制的なアジアの諸国家からの距離をもち、さらに合理の精神にたけたギリシアであった。

#### 欲望生成装置

都市はすべてを商品に変える。商品は取引の対象であり、いわば欲望を生成する装置だ。都市の計画の本質は、この取引の場を具体的に配列することにある。流れを計画することにある。流れていくのは商品である。物、人、情報媒体である。都市は交換の場代をいただく。

都市は商品の多様な束を生み出す。何かを交換する、というオブセッション——執念、妄想、強迫観念——は、それまでに交換しえないものすら商品にした。性を、生を、そして死を。

交換のプロセスが文化を生む。文化はこのようなフィクションの取引を介して形成されていく。想像力の取引といってもいい。

つまり、文化とは、欲望の先送り装置なのである。具体的な物に至り着くプロセスを、長く引き延ばして、絵や言葉や歌にする。目標到達までの時間と空間がそのテーマだ。

この文化を通して人々は、およそ取り扱えそうにないものすら象徴し、圧縮して持ち運べるような物にパッケージ化する。お守りや指輪や印章は、安全や権威や信頼をパッケージしている。

こうしたことどもを可能にする技術を集めることができる場、それが都市であった。文化という欲望の先送り装置は、その流通過程を司る仲買人を生み出す。これがいわゆる文化人、知識人であって、欲望の仲買人といっていいだろう。商人と宗教家と思想家は歴史上仲良し関係にあるのであって、いわゆる文化人、知識人もこれに含まれる。かれらは文字や美術品や工芸品に思想や意味や呪いをのせて、市場に欲望を送り出すのである。

元気のある都市は、この欲望をがむしゃらに消化しつつ新しい欲望の対象を生み出すパイタリティーに溢れている。

#### 欲望のアジャンスマン

英語でアレンジメント——整理、配列——と訳されることの多いフランス語のアジャンスマンには、取引という含意がある。アジャンス=エージェンシーであるから、流通代理中間搾取の意味が込められている。とするなら、欲望のアジャンスマン、人々の欲望の流れを配列し、組み立てていくということが、都市にとって、ごく基本的なプログラムであることに気づくことだろう。都市がその公共領域で成すべき行為の中心は交換に他ならない。しかもそこに集まるのは生産者の代理人、あるいは欲望の代理人、すなわちアジャンスに他ならないから、この交換というプログラムの整流方法、パブリックの場所のしつらえと配列こそが、歴史上の多くの都市の関心の的

# ギリシアへ

であった。それではいったい都市のアジャンスマン、つまり取引の場の配列は、どのようにデザインされて来たのだろうか。パブリックな場所に関する関心は、こう進まねばなるまい。

メソポタミアはこれまで見て来たように、神殿が交換の秩序づけにおいて中心的な役割を果たして来た。神殿は宗教施設にとどまらず、いわば徴税機関であり金融機関であった。銀行が神殿を模倣するわけである。

天空の神を代理するために、神殿は天にそびえる形を取った。神域には、神殿があり、貯蔵倉庫があり、中庭があり、火を使用する部屋があり、鍛冶作業室があり、井戸があり、神の代理人としての神官の住まいがあった。神殿を中心とするそのアジャンスマンは、当然のことながら、開かれた施設ではなかった。むしろブラックボックスに近かった。城壁に囲まれ、基壇によって幾重にも高められていた。各都市はその守護神の力によって格付けされ、なおいっそう神殿の壮麗を競ったものだった。

やがて王が交易のプロデューサーとして前面に出てくるようになる。つまり露骨に世俗の面をあらわにしても大丈夫なだけの権力組織を、人間の側が築き上げてしまったというわけである。そこでは都市のアジャンスマンは権力の象徴と祝福の装置となって、神殿・宮殿複合体が肥大化していく。

メソポタミアは、はじまりの都市が築かれた土地として、とても興味深い。ただこうした都市構造は、少なくとも未来の都市の反面教師にはなっても、参考にはなり難い。独裁を志すものにとってはよき教師だろうが。

われわれがギリシアから旅をはじめたのも、古代ギリシアがおそらくは史上はじめて、王の宮殿よりも市民の広場を優位におく都市をつくり上げたからだ。ブラックボックスの情報公開がなされたからだ。商業をはっきりと都市経営の根幹に据えた形を生み出したからだ。流れを計画の俎上に載せたからだ。そしてこの都市のプログラムのアジャンスマンが明快であり、開かれているからだ。われわれは未来の都市のアジャンスマンを考えるために旅に出たのだ。

商人とは、それまでは、王の委託を受けて旅する者たちのことだった。王こそが都市のプロデューサーであった。それが古代ギリシアにいたって、初めて、市民とその合議が都市を導いていく役割を担った。都市のアジャンスマンを決定する立場に立った。主役の交代である。神々もまた、超越的かつ不可侵の存在ではなくて、敬われはするものの、人間的で親しみもてる存在となった。神は都市を守護するものの、古代ギリシアは、むしろ市民自らが、日々の研鑽でえた知識と技術と体力に信頼をおく文化を築き上げた。時は流れ、場所が移り、新しい精神が新しい時代を開いていく。

ギリシアはその国家の原型を、王の欲望より市民の欲望においた。軍事組織を支える自由民、すなわち貴族あるいは平民に支えられた代表が、ある程度限定された形の権力を握るといふ政治体制を築き上げつつ、奴隷労働による農業基盤を固め、商人たちの欲望に賭けた。自由民は土地所有者であり、原則として農業を基盤とし、農業生産物を自足もしていたが、都市という消費の場に生活の拠点を置いた。やや例外的な、つまりは鎖国的な初期のスパルタをのぞいて、外の世界に向かう好奇心は旺盛だった。おそらくはフェニキアとの交流から多くを学んだのだろう、かれらは交易のうまみを存分に知っていたのである。

人間は生活必需品より贅沢品によって、技術と文化を磨き上げる。交易の対象は、歴史上、決まってもいつも贅沢品だ。ギリシアのオリエントとの違いは、これを特権階級に独占させなかったことにある。ギリシアは、他者によって刺激された欲望を、オリエントの専制国家のように王の恣意にまかせて貯めこむ道でなく、欲望の流れを塞ぎ止めず、目に見える形に開きながら、そこに自らの技術の洗練を繋ぎこむ道を選んだのだった。海運商業国家は、合理的な思考をその基礎にもっている。その合理的な思考の道筋自体もかれらの関心事となっていき、この地に哲学を生むことになる。



## ポリス

ギリシアのポリスはひとつの世界、こう言ってよければひとつの宇宙だ。ギリシア人たちは他の  
茫漠とした広がりからはくっきりと区別された場所と価値観をもつ存在として、自らを位置づけ  
ようとした。局所に世界をこめようとした。

大きな変動の時代、すなわち「暗黒の時代」を通して、生産、交通、通信、居住の技術の革新が  
進む中、フェニキア人たちがそのネットワークを形成したとするなら、ギリシア人たちはその端  
末のパッケージとして、史上類例のない居住の形を創り出した。デザインといい、プレゼンテー  
ションといい、機能といい、リスクおよびクライシス・コントロールのシステムといい、都市と  
いう花の白眉、それがギリシアのポリスである。

かれらは、オリエントの専制国家から物理的にも精神的にも距離をおいていた。地形、風土もお  
おいに異なっていた。細かい鬣を持った海岸線に集住地が散らばっていて、大河もなく、平野も  
なく、平原もなく、砂漠もなく、陸の交易路にも接続しておらず、巨大な灌漑をおこなう必要も  
なく、巨大な専制国家権力の必要もなかった。海のみが外部に開いた窓であり、道だった。

ギリシア人たちも、もちろん幾度も移動の波を繰り返しながら、今日ギリシア本土と呼ばれる  
地域、そしてアナトリアのエーゲ海岸、いわゆるイオニア地方に根づいていったのだった。エー  
ゲ海がかれらの庭だ。移動の欲望はその後も継続し、やがてマグナ・グレアキア（大ギリシア）  
と呼ばれることになるイタリア南部、シチリアをはじめ、フランス、スペインにまで至る地中海  
一帯に植民都市ネットワークを創り上げていく。かれらの発明は、その単位としてポリスという、  
ライブニッツのモナドのような、他者との窓を持つ自立した居住単位を生み出したことだった。  
紀元前 2000 年紀から 1000 年紀にかけての生産・交通・通信・居住のパラダイムシフトの胎  
動を経て、地中海全体に新たなネットワークが築かれていった。そして紀元前 8 世紀に入って、  
ポリスはその産声を上げる。それは他者との関係に支えられつつ自立した都市国家だ。ギリシア  
人たちがフェニキア人たちが文字を受け継ぐのとはほぼ同時期のことである。

それは個人よりも共同体の論理を上位におく居住形態であった。個人の欲望はポリスがあっては  
じめて可能となる。公共への献身こそが富裕な市民の義務であり名誉であった。ギリシアの人々  
は自らをパブリックな存在へと成形していった。パブリックな場所こそが生活の中心をなす舞台  
だった。

それはまたつねに他者との交戦を前提とした軍事共同体だった。とはいえ軍事専門の軍隊は存在  
しなかった。市民皆兵である。したがって団結は何より大切な行動指針だった。各階層の市民た  
ちが存在したが、政治的な観点から見たかれらの軍への貢献の評価が、結果的にデモクラシーと  
いう思想を導いた。共同体を守る軍事への貢献が、階級を平準化していくからだ。

H.D.F. キトーはギリシアのポリスがたいへん小さい規模であったことに注意を促している。<sup>9</sup>  
プラトンが理想的な規模として挙げた数字は 5000 人である。多くのポリスはその規模にも達し  
ていなかった。20000 人を超えるポリスはたった 3 つのみ。シラクサとアクラガス（ともにシ  
チリア）、そしてアテネであったという。都市は規模や成員の数ではなく、その文化や政治的理  
念の質にかかっているのである。

かれによれば、ギリシア人がポリスという居住形態を選んだのは、経済的、地形的、風土的条件  
によるというより、一体化した風景の中にもともに住むことを好むというその性格のためだ。街角  
で語ることを好み、直接的なコミュニケーションにこだわった。コミュニケーションをパブリッ  
クなものとして全員で共有すること、これを生活の基本的な原理とした。

パブリックな場所を景観的に代表するのはアクロポリスであった。ポリスとはもともと砦であり、

H.D.F. Kitto 'The Polis', from *"The Greeks"*  
(1951) : "The City Reader", edited by  
Richard T. LeGates and Frederic Stout, Routledge,  
1996, pp32-36.

やがてそこに集うすべての人々をさすようになる。すべての人々に呼びかけうるその規模のゆえに、ポリスは正義を求める人々の要望を満たした。目の届く範囲と声の届く範囲が組み合わせられて空間の配列がなされる。高い場所と低い場所の聖別、そしてその景観デザイン、すなわち一体化した風景。これが、共同体としての連帯意識を育てたのである。声とまなざしが人々を結びつける。ポリスとはそのようなコミュニケーションの欲望に根ざした居住形態であった。

前5世紀のペリクレスはアテネで展開される文化的生活をすべての人々に知らしめようという意図の演説をおこなっている。悲劇、喜劇、詩の朗読、ホメロスの朗読、運動競技、競い合い、楽しむ文化をおおいに誇りながら。かれはアテネを「ヘラスの学校」と呼んだ。ギリシア——かれら自身の呼称によるならヘラス——すべての規範たらしめようとしたのである。

アリストテレスは「人間は政治的動物である」と述べて、ポリスが人間の精神的、道徳的、知的能力を実現する唯一の場所だと位置づけた。ポリスが人間をつくる、とさえ言ってもいい。人間を社会的身体として初期化するのだ。フォーマットするのだ。人間は他者との接触と競争と交歓を通して人間になる。このことをポリスという居住形態の形成を通して実践しようとしたのがギリシア人だった。

ポリスは政治と文化の場である。政治的人間と文化的人間の交歓の場であり、経済的には生産を奴隷に依存した、自由民による消費都市であった。人類は人間の社会的な身体を、徹底的に磨き上げる都市形態をギリシアにおいて生み出したのである。

#### 神域の形成

前8世紀に顕著なのは、神殿の建立である。都市の神に捧げるこの神殿の建立を通して、かれらは個人を超えた共同体の共有する価値観を固めていった。エジプトやメソポタミアが、墓の建設に現世の存在証明、いやむしろ来世の存在保証を求めたのに対して、ギリシアの人々は、神殿への奉納を通して、自身の現世での存在証明をおこなおうとする。ギリシアの人々にとって、あの世にしこたま貯めこんだものをもっていくよりも、この世で名を上げることが何よりの人生だったのである。

ポリスごとにも神域が形成されたが、そればかりでなく、ヘラス（ギリシア）のポリス群全体の神域が築かれた。代表的なのが、オリンピアとデルフォイだ。

オリンピアは競技（アゴーン）の場であった。ヘラスの人々は競い合うことの重要性を信じていた。競い合うことを通して、人間は磨かれ、都市は、国家は発展する。これがかれらの信念だった。オリンピアの祭典がはじまったのは紀元前776年とされる。競技の勝者に与えられるのはオリヴの冠と栄誉のみ。競技（アゴーン）を愛するギリシア人。競争原理が文化を進める。

ヘロドトスの記述によれば、紀元前480年、名高いテルモピュライの戦いで、ペルシアの大群を率いるクセルクセスは、多大な犠牲を払い散々な目に遭いながら、かろうじてレオニダス率いるスパルタの精鋭たちの守りを抜ける。クセルクセスはこの自軍の惨憺たる有様に憤激し、嘆息しつつ、レオニダスたちの奮戦と玉砕ぶりに啞然とし、どうやらこの遠征の成果を訝しみはじめた。クセルクセスは、やがて来たるべきサラミスの海戦で敗北してペルシアへと逃げ帰ることになるのだが、そのテルモピュライからサラミスへの途上で、ギリシア軍から脱走したアルカディア人に遭遇し、ギリシア軍の情勢を聞き出そうとする。すると「ギリシア人はいまオリンピア祭を祝っているところで、体育や馬の競技を観覧している」と言うではないか。この大戦争のさなかに、と驚きあきれながらも、なおその競技の賞品を問うたところ、なんと「オリヴの枝の冠」のみだと言う。「そなたはわれらをよりもよって、何たる人間と戦わせようとしてくれたことか。金品ならぬ栄誉を賭けて競技を行う人間とは」とは、良識派の部下の発言であり、これをクセル

クセスは臆病者と譏るのだが、おそらくはかれの心に兆した良心の声を、この言葉は代弁している。ヘロドトスはそうした暗示をこめて、あえてこのエピソードを挿入したのだろう。<sup>10</sup>  
ヘロドトスの『歴史』においても、その暗示的な神託によって運命を導くデルフォイは、ヘラス全土に鳴り響く聖地だった。もともとが神域であり、紀元前 590 年に祭典がはじまっている。戦争の帰趨を、王家の運命を、植民の成功を、神託でうかがう。交易や権力者や植民の情報が集まる。それはさながら世界銀行であり、国際交流拠点であり、いわば植民情報センターである。ヘラス全土からの信仰を集める神域、いわば虚の中心が、ポリス相互の利害を調停する役割を担ったのだった。

フロイトによって無意識の基底を成すとされた父母子の三角形、オイディプスをめぐる不幸な神託も、デルフォイがその舞台である。これはアフリカやアジアの神話であってはならなかった。あくまでもギリシア神話でなければならなかった。ヨーロッパ精神を古代ギリシアに結びつけようという 19 世紀的欲望が、この物語を発見したのである。かくしてギリシアは現代ヨーロッパの神域となった。

### アゴラ

アゴラは、政治的にも経済的にもギリシア都市の中心に位置する。この意味でも、都市のアジャンスマン、すなわち配列の中心であった。まさしく古代ギリシアを象徴する都市のプログラムであった。

アゴラは確たる境界をもたない。ゆるやかに囲まれながら、他者との関係に向けて開かれている。ここからコーラ<sup>11</sup>という言葉が想起される。ギリシア語では場所を表す言葉として、トポスとコーラがある。トポスが容器的な空間を指すとするなら、コーラは場的な空間を指す。トポスは境界をもつがコーラはその中に何かがあるところの広がりである。コーラは、いわば、他者を映す鏡のような役割を果たすものかといいたいだろう。コーラは他者に開かれた場を意味している。アゴラは文字どおり、他者との関係の場である。

外の世界とつながっている。誰にもアクセス可能である。古代ギリシアはアゴラという広場によって、このことを誰にも見える形にした。この広場に、都市のプログラムの多くは面してつくられたのである。開かれた場所の感覚。古代ギリシアの都市のアジャンスマンの底を流れる感覚である。たとえば外の世界との関係が、宮廷+御用商人という一部の癒着に集約されて、高い城壁の中で誰にも知られずひそかに事が運ばれる。都市の住民は宮殿を通してしか外の世界に関わることができない。これではまるでカフカの『城』だ。貢献による徴収と恩恵という形の分配。宮廷経済は閉ざされていた。メソポタミア諸都市が神殿+宮殿にすべての都市のプログラムを詰め込んで、いわば神聖化されたブラックボックスをつくっていたことはすでに見たとおりだ。

これに対して、古代ギリシアが地中海や黒海沿岸各地に植民都市として築き上げていった都市の姿は、開かれたプログラムの形をもっている。多様に分化した都市のプログラムが、それぞれにふさわしい形を与えられ、計画的に配列されている。かれらの関心は、いかに他者に対して開かれたアジャンスマンをもつか、ということだった。

アゴラにはじまり、アンフィシアター、ジムナジオン、スタジオン、オデオン、プーレウテリオン、etc.そしてアクロポリス。人々はそこで何がなされるのかを知ることができる。いわば情報公開である。地中海という交通の海に面して、海運技術も発達し、周囲の資源も開発され、続々と植民都市ができて人々も多く住み着き、魅力的な特産品がえられる、そんな新しい時代にふさわしい都市の形態を、かれらは生み出したのだった。川の水争いから海という交通の場へ。人類は技術の発達によってまた新しい生活スタイルを生み出し、これにふさわしい都市のアジャンス

プ  
ラトンの『ティマイオス』  
の説明にしたがうなら、  
コーラは「場」であり、あらゆる  
生成の「養い親のような受容者」  
にあたり、「何か、目に見えない  
もの、形のないもの、何でも受け  
入れるもの、何かこうはなはだ厄  
介な仕方、理性対象の性格の一  
面を備えていて、きわめて捉え難  
いもの」であるという。(『ティマ  
イオス』プラトン全集 12、種山  
恭子訳、岩波書店、より)

マンをつくりだしていった。

ギリシアの諸都市を訪れた商人たちは、そのアジャンスマンにかれらを迎え入れる都市の姿勢を見出したろう。どこで商いが行われ、どこで意志決定がなされ、どこで楽しむことができるのか。この取引の場の配列、組み立て、アジャンスマンが、いかにも分かりやすくできている。物が、人が、つまりは情報が流れやすいように、都市が計画されているのである。

外部から参入しやすく、内部の風通しがよい。そのような都市を、古代ギリシアの人々はつくりあげた。外部から見れば不透明で閉鎖的であり、談合と癒着で風通しの悪い都市は、やがて嫌われ、物も人も情報もそこをバイパスして行って、ついには滅びてゆく。メソポタミアから地中海へ。個々人の名を重んじる合理的で明快なアジャンスマン。古代ギリシアが生み出した新しい都市の形であった。